

受けとめとしての念仏

東京大学東洋文化研究所教授・丘山 新【おかやまはじめ】

手を合わせて祈る

仏教を教理的に学び人にそれを語ることはそれほど難しいことではありません。しかし仏教の本質をもっと意識的に知りたい、そう思っている方々と一緒に語り合いながら考えていく場合には、やはり自分の命をかけて向き合うぐらいの気持ちでないと、お互い時間の無駄になるような気がするのです。そういう意味で、本日は自分が感じていることをお話できればと思っています。

私たちはお祈りをするときには胸の前で手を合わせます。宗教によって形にささかの違いはありますが、世界中のどこでも人びとは手を合わせてお祈りをします。私はこの合掌がとても好きです。

浄土真宗ではお祈りをしてはいけない、ということになっているそうです。それは、現世利益的なお願いごとをすべきでないという意味だそうですが、人間どうしても、病気が治りますようにとか、世界が平和になりますようにといった願いはあるはずで。

しかし、そうしたことを考えなくても、ただ手を合わせて、じーっとしている。眠る前にしばらく手を合わせてみると、心がリラックスしてくるということはあると思います。いろいろ浮かんでくる思い、ああいう願い、こういう希望、その果てに私たちは何を感じるか。何も感じないかもしれません。必ずしも何か感じなければならぬこともないと思います。

心のリラックスというのは、意外に難しいものです。身体をリラックスさせるというのは、立っていても肩の力をストンと落とせば体全体の力が緩む感じがするものです。しかし、お医者さんから、ストレス解消には心をリラックスさせてくださいなどと言われても意識的にどうしたらいいのかわからないわけです。

すべてを救うという誓い

そこで、今日のテーマである「念仏」を考えてみたいと思います。いったい、念仏ってなんなのだろう、念仏というのは、称えればいいのか。あるいは、称えさせられるなどという言われ方もします。

私は決して念仏を否定的に考えているわけではありません。しかし、辞書には念仏とはこういうものだと書いてありますが、そういう答えではなくて、そもそも念仏って何なのかということを考えているのです。

まず、念仏といえばこの文章、『歎異抄【たんにしょう】』第一章に、

【ここから引用。1字下げ】

弥陀【みだ】の誓願不思議【せいがんふしぎ】にたすけられまいらせて、往生【おうじょう】をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつたところのおこるとき、すなわち攝取不捨【せっしゃふしゃ】の利益【りやく】にあずけしめたまうなり。

【引用ここまで】

ということが言われています。この最初の「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて」について考えてみます。弥陀の誓願不思議というのは、法蔵【ほうぞう】菩薩が一切の人を救い浄土に導いて行こうという誓いを立て、一生懸命修行なされて、今やその誓願を実現して、阿弥陀如来として西方にいらっしゃるというのがこのお話です。現在の浄土教、浄土宗や浄土真宗の根本的な教えです。

その法蔵菩薩が誓願を立てました。その数は伝承によって二十四とか四十八とか、あるいは四十九あるとも言われますが、この誓願を一言で言うならば、すべての人を救わない限り私は仏にならないんだという誓いです。その法蔵菩薩はすでに阿弥陀如来となり極楽浄土にいらっしゃる。ということは、その願いはもう実現されているということになります。つまり、すべての人は救われているというわけです。

「弥陀の誓願不思議に」とは、阿弥陀さまの不思議な誓願に助けられて、ということです。助けられてというのは、私は「力」だと思ふのです。この人を助けようと誰かがそういう約束をしてこの人は救われた、という客観的な話ではなくて、法蔵菩薩の力、誓願の力というのは今でも働いている、未来永劫にわたって働き続けているんだ、というのが私の実感なのです。それを皆様へのメッセージとして伝えたいのです。

ですから阿弥陀さまの不思議な誓願にたすけられまいらせて、というのは、昔そういうことをしてくれたから私たちはすでに、というのではなくて、今もそういう働きがあってこそ、私たちはお助けいただいているのであると思っています。

もう少し説明します。例えば、今日のように空が曇っていると、太陽は直接見えません。でも明るいのです。夜は暗かったのにどうして今はこう明るいのでしょうか。

太陽は直接には見えませんが、きっと今日も空に上ってくれている。直接は見えないから証明はできない。嘘でしょうと言われたら反論できない。しかし現実的には、科学という学問の上では、太陽は高く上っているはず。だからこういうふうにも明るくなって、少し寒い日が続いているとはいえ、やはり夜中よりは少し暖かくなっている。それは太陽が光り輝いてくれているからでしょう。もし太陽がいなくなったら、瞬間的に地球は冷たくなって、みな凍え死んでしまうでしょう。

それと同じように、阿弥陀さまには直接会うことができない。お寺に行くと阿弥陀さまの像がありますが、阿弥陀さまご本人にお会いになったことは皆さんもないと思います。仏教の経典では、仏さまの究極の姿というのはもう姿形がないのです。見せているのはみな仮の姿です。だから直接には見えないのです。キリスト教徒の人たちだって、神さまなど見た人はいないわけです。だから仏さまや神さまがいるとかいないとか、人間的な計らいで勝手なことを言うわけです。

太陽なんて本当はないんだとか、いやあるに違いないとか、そういうことで議論してみたところで、

信じる人にも信じない人にも、同じように光はずっとそそいでるじゃないですか。それが私は誓願だと思っているのです。今も、大昔も、それから未来永劫にわたって、状況は変わらないということです。そういう中で私たちは生きている、あるいは生かされているからこそ、そういうことを感じとれるのではないかと思うわけです。

実感することが大切

では私たちはどのようにして不思議なる誓願の力を受けとめられるのでしょうか。どうやって受けとめ、これを実感できるのでしょうか。

私は実感することが何より大切だと思っています。それは何事でもそうだと思うのですが、大学で研究していると、実感というのは非学問的なのでだめだということです。悟りを理屈で一生懸命に説明しなくてはいけない。りんごのおいしさを一生懸命に説明しなくてはいけない。けれど、りんごのおいしさなんてどうやって説明したらいいのでしょうか。甘いとか酸っぱいとか言っても、それでは言い尽くせません。それと同じで最後はやはり自分自身で体験し、実感していくよりほかないという気がするのです。

ただ、最後はあなた自身で感じなきゃいけないと言われると、正直なんだか突き放された感じがするじゃないですか。阿弥陀さまの誓願、不思議な力は皆さんご自身で実感してください、お経を称えるだけじゃだめですよって言われたら、どうも見捨てられた感じがしてしまうでしょう。

そうではなくて、ではどうしたらそういうことを実感できるのか、そこまで私たちは考えていかないといけないと思います。

仏に会い法を聞く

紀元前五〇〇年ごろから四〇〇年くらいの中に、インドでお釈迦さまが教えを説かれ、仏教が成立しました。今日ではその当時の教えを原始仏教と呼んでいます。それからだいたい五百年が経った頃に、大乘仏教が起こってきます。

原始仏教の頃は仏さまを人間の姿で表現することはしませんでした。その代わりに、絵を描く時には法輪や菩提樹や足跡などで表現しました。弟子たちの姿は描かれるのに、お釈迦さまのところだけそうした象徴で描かれたのです。仏像が造られ始めたのは、現在の研究ではだいたい紀元一世紀半ば過ぎと考えられています。マトゥラーとガンダーラ地方でほぼ同時期に仏像が生まれました。

仏像がなぜ造り始められたのかと考えますと、信者が仏さまに会いたいと思ったんでしょうかね。でもそれだけならもっと昔に、お釈迦さまが亡くなられてすぐに仏像が造られてもおかしくないはずなのですが、とにかく実際に仏像が造られるのは紀元一世紀の半ば過ぎなのです。

その頃、時を同じくして登場するのが大乘仏教です。新しい経典を作りながら改革運動が始まるわけです。『般若経』や『無量寿経』や『法華経』が作られてゆきますが、大乘仏教の一番古い経

典の一つに、『般舟三昧經【はんじゅざんまいきょう】』があります。これは仏に会うことを説く經典なのです。一方では仏像という現物が作られており、もう一方では仏さまに会うという修行方法が説かれる。原始仏典では仏の姿を思い浮かべるといふことはしなかった。してはいけなかったのです。それが大乘仏教になると、そういうことをする經典が作られてきたのです。

三昧經典というのは仏に会うということを説く經典です。歴史上のお釈迦さまはもう四百年ほど前に亡くなられている。なのになぜ、仏に会うなどということを行うのかというと、歴史上のゴータマ・ブツダさんは、仮に肉体を持って現れただけで、その元になる永遠の如来というのが存在するんだと考えたわけです。それを法身仏【ほっしんぶつ】と言います。

永遠に存在する如来に会うこと、これを漢訳仏典では見仏【けんぶつ】と言います。仏に見【まみ】えて法を聞くのです。

一方、観仏という行もあります。観仏は難しいのです。一生懸命に訓練して仏を思い浮かべます。『観無量寿經』ではまず実際の仏像を見て、次に目を閉じて仏像がきれいに思い浮かぶように訓練するのです。最後は阿弥陀さまを思い浮かべられるまで訓練する。

見仏というのは、そんな難しいことを考えてはいなくて、夢の中で会うのと同じだということです。会ってしまうのです。仏に会いたい、会えればいいというだけでなく、修行者たちは仏に会って教える聞くのです。見仏と聞法【もんぼう】がセットになっているのです。

ところが、ちょっと考えてください。仏さまに会えたとして、瞑想の中で教える聞くというのは不思議ではありませんか。隣に和尚さんがいて、經典を読んでくれて、それが聞こえる、というのではないのです。永遠の如来に出会って、その如来が私に語りかけてくれるわけです。

大乘仏教の經典を作っていた人たちというのは、そういう三昧の中で仏に会って説かれた教えるを言葉にしていった。そうしてできたのが大乘經典なのです。理念的にはそういうことになります。仏典の中で、加護力【かごりき】とか加持力【かじりき】などと出てくるのは、基本的にそういう教える聞き取る靈感みたいなものです。

それからもう一つ、法を聞くというのを突き詰めてゆくと、たんなる教えだけではなく、「生かされている」という力を三昧の中で受けている、そういうエネルギーを受けるのではないかと私はそんなふうに感じているのです。

心の眼で見る

私は十年ほど前に緑内障と診断されまして、その時はまだふつうに見えているのですが、病院を出たのがちょうどお昼前頃でした。空がとてもきれいで、うわあーきれいだなあと思ったのを覚えています。そしてその時に考えたのは、いよいよ肉眼が見えなくなると、心眼が開かれてくるのかなあ、ということでした。その時、心の中はとても不安で、今も不安なのですが、不安は不安のままそんなことを思ったのです。

できれば肉眼を開いたまま心眼が開かれてくれるとありがたいのですが、そうもゆかないようで、肉眼が少しダウンしてくると、そのぶんだけ心眼が開かれてくる、そんなように自分勝手に考えた

わけです。

ところで、心眼というのは別にこの世界を見るわけではありません。いったい心眼とは何を見るのでしょうか。「たとえ肉眼が見えなくなっても、心眼が開かれてくるから大丈夫だよ」というのは、なんのなくさめにもなりません。肉眼で見ているこの世界が見えなくなってしまう。その代わりに、心眼が開かれてこの世界がまた見えてくるかという、そんなこともなさそうです。

この肉眼・心眼ということから連想して考えたのですけれど、耳にも肉耳・心耳というものもあるのではないかと。物理的な耳と内側の耳。この内側とは自分の内側だけではなく、外の世界と同じくらいに、あるいはそれ以上に広がっているのかもしれない。聞法【もんぼう】というのは、確かに実際の耳で仏の教えを聞くことではありますが、それだけではなくて、心の耳が聞くような気がするのです。

余談ですが、聖という字の部首は、漢和辞典で引く時に何だと思いませんか。聖の字は、耳と口と王でできています。このうち王という字は、単独の部首ではなく、玉偏に属します。王様の王の字は恐れ多くもというわけで一点を加えて玉が部首になります。では聖の部首はというと、王でも口でもなく、耳なのです。聖人というのは、聞き取る耳のある人なわけです。

インドの聖典には二種類あります。一つは天啓聖典、これはシュルティと言いまして、「聞かれた」聖典という意味です。もう一つはスムリティで、これは瞑想する人たちが創作したものです。もちろん、スムリティよりシュルティのほうが格が上です。例えば、『般若経』や『無量寿経』や『法華経』には作者がいらない。けれど『中論』という書物はナーガールジュナの作だと言われています。

微妙な関係に見えますが理屈的には簡単なのです。実際には誰かが称えだしたに違いないですが、その人は私がそれを説いたとは思っていない。ただ聞いたことを伝えているんだというのです。聞こえてくる何かを私たちが心の耳で受けとめること、それが聞法ということなのでしょう。

阿弥陀仏の名を聞く

この聞くということについて、興味深い例があります。

阿弥陀仏の四十八願【しじゅうはちがん】といえば、『無量寿経』という經典に書かれているものですが、実は仏典が漢訳されてきた歴史の中で、この『無量寿経』より古い經典にも誓願が出てきます。その一つ、『大阿弥陀経』という訳にはこうあります。

【ここから引用】

第四願。使某作仏時、令我名字、皆聞八方上下無央数仏国、皆令諸仏、各於比丘僧大坐中、説我功德国土之善。諸天人民【作字、虫偏 + 口の下に月】飛蠕之類聞我名字、莫不慈心歡喜踊躍者、皆令來生我國。得是願乃作仏、不得是願終不作仏。

【引用ここまで】

阿弥陀仏の誓願の四つ目として、私（法蔵菩薩。のちの阿弥陀仏）が仏になったら、私の名前（阿弥陀仏）が十方に限りなく響き渡り、諸仏が私のこの世界の素晴らしさを説くならば、その時に神も人も小さな虫まで誰もが、我が名前を聞いて心から喜ぶであろう。この願いが叶うならば

私は仏となるし、これが得られなければいつまでも私は仏になるまい、と。

この中で重要なのは、「我が名字を聞く」というところです。ふつうは阿弥陀仏の名を称える、というところでしょうが、ここでは「聞く」と言っています。これは、先ほどの聞法ということなのだと思います。瞑想の中で聞いているかどうかわかりませんが、そういう中で、心の耳で聞きとめる。その名前が聞こえてくる。その前のところも、私がもし仏になるとしたら、私の名前が世界中に響く、それを心の耳で聞きとってほしいという願いなのだと思うわけです。

声に出して称える

次に、浄土三部経の一つ、『観無量寿経』を見ます。

【引用ここから】

仏告阿難及韋提希。下品下生者、或有衆生作不善業五逆十惡、具諸不善。如此愚人以惡業故、應墮惡道經歷多劫受苦無窮。如此愚人臨命終時、遇善知識種種安慰為說妙法教令念仏。彼人苦逼不違念仏。善友告言、汝若不能念彼仏者、應稱歸命無量寿仏。如是至心令声不絶、具足十念、稱南無阿弥陀仏。稱仏名故、於念念中、除八十億劫生死之罪。

【引用ここまで】

仏は、弟子の阿難【あなん】と、阿闍世【あじゃせ】のお母さんである韋提希【いだいけ】夫人に語られました。下品下生【げぼんげしょう】という一番劣った愚かな人は、これまでの悪い行ないのゆえに、必ず地獄、悪道に落ちて行って、限りなく長い間苦しむことになる。このような愚かな人が臨終の時になって、たまたま善知識つまり良き友人に出会い、慰めてくれて、念仏させようとしてくれる。ここで念仏と言うのは仏を思い浮かべる、イメージトレーニングさせることです。親切な良い人が、大丈夫だよと言って教えを説き、仏を思い浮かべさせようとしてくれるのです。

しかし苦しんでいる人は、苦しみが差し迫って仏を念ずる暇もない。そうするとやさしい友人は「もし仏さまを思い浮かべることができなかつたら、『歸命無量寿仏』『南無阿弥陀仏』と称えなさい」と言うのです。そのように一生懸命声に出して十回でも言えば、その一瞬一瞬のうちに、今までの限りなき長い間のすべての罪はそれで取り除かれていく、というわけです。

南無阿弥陀仏の南無とは、インドの言葉の音写です。ナマステという挨拶を聞いたことがあると思いますが、あなたさまにいのちを預けます、皈依いたします、歸命しますという意味です。阿弥陀はアミターユスの音を漢字に写したもので、その意味は限りない寿命、無量寿です。つまり歸命無量寿仏と南無阿弥陀仏とは同じ意味になります。

永遠の仏が働いている

念仏とは本来、仏の姿を思い浮かべることで、それは聞法によってそのいのちを感じとってゆくこと、そういう中で、阿弥陀仏の名前が聞こえてくる。ところがそれはとても難しい、それならば口で称えたらいいだろうということが主流になってくるわけです。

もちろん私はここで口称の念仏の良し悪しを申し上げているわけではありませんが、親鸞聖人は南無阿弥陀仏を称えられなければどうすればよいかと問われて、そういうことはほっぽっておけばいいだろう、と答えています。自分が言うのではないから、自分が言いたくない時は、しょうがないだろう。でもきつと、言いたくはないけど、言ってしまう時だってあるのでしょう。自分の意志に反して、阿弥陀仏の力によって称えさせられる。力を受けて、仏が言っているのか、私が称えているのか、私たちの意識としてはちょっとわかりにくいです。

ゴータマ・ブッダはダンマに目覚めた。ダンマつまり法は永遠なものだから、同じく過去にそういう人がいてもおかしくない。そう考えたのが紀元一世紀ごろに生まれた大乘仏教でした。過去にもいた。未来にもいるだろう。弥勒【みろく】というのは未来仏として比較的初期の段階から説かれています。

原始仏教ではゴータマ・ブッダただ一人、それが大乘仏教の時代になると、永遠の仏と受けとめるようになった。これを久遠実成【くおんじつじょう】の仏と言います。過去から未来にわたって存在している悟りを完成した如来という意味です。『法華経』の教えとしてよく知られています。

神や仏が存在するとかしないかとかいうことは誰もよく考えます。何でそんなふうに考えるかという恐らく、実際にお目にかかった人がいないからでしょう。キリスト教でもそうですし、イスラームでもそうなのです。仏教では仏像はたくさんいらっしゃいますが、究極の仏は姿形がないのです。私たちの肉眼では見えないのです。見えないのに一体どうして、永遠の如来なんて考えるのでしょうか。

大事なものは、神や仏がいるかいないかということよりもっと、その働きのほうだと私は思うのです。私たちにとって、太陽は遥かかなたにあって、たとえその実物が私たちに見えたとしてもあまり意味はありません。太陽が私たちに光をそそいでくれる、そういう働きが大事なのです。

たとえばここにある人がいるとして、その人がいるかいないかは、あんまり重要な意味はなくて、むしろその人がこっちを向いて目が合ったりするとか、あるいはうなずき合ったりとか、語り合ったりと、そういうやりとりが意味を持つわけです。だから私の恩師はすでに亡くなられていて、肉眼で見える形では存在しませんが、大事なものは恩師と私とが何か響き合うことです。

私がある時からのんきになったのは、仏は永遠に存在する、その仏が働き続けてくれていると思えるようになったからなのです。

歎異抄の受けとめ方

そこで冒頭の『歎異抄』に戻ります。『歎異抄』にはすでに素晴らしい解説がたくさんあります。そこへ私なりに付け加えるとするなら、私は祈りたいと思っていますから、こんなふうに読めばそれが実感できるかと思っています。

まず 弥陀の誓願不思議、この不思議とは、思議できないということです。思議とは人間的な計らいです。それが否定されているのですから、人間の考えが及ばないようなという意味です。つまり弥陀の誓願不思議とは、阿弥陀さまから常に働いて止むことのない、人間の思議、慮り、計らい

を遥かに超えた働き、ということです。

その誓願に たすけられまいらせて とは、その弥陀からの働きを受けとめて、働きによってすでに私たちは救われているという事実です。これは人間の主体的な選択による「自力」「他力」の問題ではないのです。すべての人が阿弥陀仏からの働きを受けているという事実です。日本では伝統的に千年近く、自力か他力かという選択の話になっているのですが、私はそういう並列の話ではないと思っています。

私たちはこの世に生まれてきて、自我の自立という年齢になると反抗期になったりもしますが、人は愛されて生まれてきたんだとやがて気づきます。自分は生かされているんだと思い至り、やっぱり大人になろうと思う時が来ます。そう考えると、私たちのいのちというものは、最初から受け身的なあり方をしていると思うのです。だから近代的な自我が、主体的に、自主的に、など言うのは錯覚ではないかと私は思うのです。

もう少し緩やかに考えるなら、 たすけられまいらせて というのは、私たちが無条件に、阿弥陀から、如来から、あるいはキリスト教で言えば神から、そういう働きをすでに受けていて助けられている、そう自分が感じる前に働きを注がれてしまっているということなんだと私は思っています。

そして 往生をばとぐるなりと信じて、この信じるというのは、自分が勝手に信じるというのではないのです。「如来よりたまわりたる信心」という言葉もありますように、より適切に言えば、「信じさせられる」「心からうなずかされる」ということです。根元的かつ受動的な事態です。信じていると私たちが言うのもたいていは嘘っぽくて、「今日来てくれると信じていたのに裏切られた」などと言ったって、相手にも都合があるわけですから、そう一方的に信じられても困るわけです。「愛していると信じていたのに」とか「今日は雨が降らないと信じていた」というのは、自分の願いを勝手に言っているだけでしょう。それは思い込みであり、妄信です。

けれども宗教的に信じるというのは、これとは違うのです。自分の願いとは別にうなずかされ、信じさせられているわけです。

だから こころのおこるとき とは、自分の意思を発するのではなく、阿弥陀さまからの働きを受けとめ、それを実感することです。超越者としての阿弥陀と、人間との関わりにおいて、人間の側からみた受動的な出来事にほかなりません。自分で起こすところならば、自分で止めてしまうことも可能です。しかしそういうものではないのです。

そうすれば 摂取不捨の利益にあずけしめたまうなり、摂取不捨とは、決して見放さず救いとしてくれるということ。そういう利益にあずかることができる、と。これが『歎異抄』の第一章の言葉です。

「そのままがいい」

この話を以前に別の所でしたところ、「お前は気楽すぎる」といわれました。そうかもしれません。たとえ摂取不捨の利益にあずけしめても、苦しいことがなくなるわけではない。しかし、私が苦しくて苦しくてしょうがない、そういうときに心の耳にこう聞こえてきた。「そのままがいい」と。苦しいのに、そのままがいい、ってひどいでしょ。お前はそのまま苦しんでいるというのですから。

けれども次の瞬間、ふっと、ああそうかと思ったのは、後ろから摂取不捨してやるから、歩きなさい、悩みなさい、悪あがきなさい、みんなが見放しても、自分はお前を見放さないから、ということなのだなと思ったのです。あたかも太陽が光を注ぎ続けてくれているように。

どうしようもなく苦しくても、そういう苦しい真っ最中に、自分は摂取不捨の働きを受けているんだと感じて生きられたらいいなと私は思っています。

苦しくてもいいのです。苦しい時に「苦しい苦しい」と言っていると、もうそれを言うのも面倒くさくなってくるものです。もちろん病気の痛みの場合はそんなに甘くないと思いますので、それを同じように受けとめようだなんて思わないでください。計らいは一切なしです。

私はそのような思いで念仏というものを受けとめたいと思うのです。

おわり

このお話は二〇〇七(平成十九)年十二月八日の東京会場の講演に加筆訂正したものです。
(編集部)